
夕立に咲いた青い花と僕の気持ち

一河善知鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕立に咲いた青い花と僕の気持ち

【Nコード】

N9071A

【作者名】

一河善知鳥

【あらすじ】

人を好きになるのってあまりに突然で、自分でも驚いてしまう。だけどその気持ちはきがつけばもう止まらなくなっている。

初めはなんでもない気持ち。

気がつくとはそれは…。

*

*

*

朝から降っていた雨は、昼前には止んで太陽が顔を出していた。
街全体の空気が雨に洗われて新鮮になっている。

太陽の熱も程よく街に届いていた。

僕はそんな街を友だちと歩いていた。

黒と赤のランドセルが合わせて五つ、学校の近くにある公園に向
かっている。

いつも学校が終わってからはその公園で遊んでいる。

公園の中心にある木の下にランドセルを放り投げて、日が暮れた
ら帰る。

だから、専ら僕の世界は言えと学校とその公園だけだった。

「今日は何しようか」

今日もいつものようにランドセルを置いて友だちの一人が言った。

「かくれんぼ」

「だるまさんが転んだ」

「おにじっ」

みんなが口々に自分の遊びたいことを言った。
そして、やっぱりそれもやりたいな、と頭を悩ませる。

「キャッチボール」

みんなが長考しているときに急にそんな言葉が飛び込んだ。
提案したのは僕たちの中で一番のしつかりものはなちゃんだった。

「あ、じゃあわたしも！」

「キャッチボールもいいね」

はなちゃんの一言に僕を含めたみんなが賛成した。
僕は自分のボールを取りにランドセルのある木の下まで走っていった。

「…あれ？」

ランドセルの中を覗き込み、僕はそう呟いた。
今朝、確かにランドセルに入れたはずのボールが入っていないのだ。

「どうしたの？」

頭の後ろで声がしたので、僕は大きな声で「ボールがない！」と答えた。

教科書や筆箱を出してみてもボールは見当たらない。

「ねえ。今日の昼休みにキャッチボールした後、どこにやった？」

「…あ。」

僕はそう言われるとすぐに全部を思い出した。

そう、今日は昼は雨が止んでから外でキャッチボールをしたのだ。そしてそのあとボールは教室にある自分のロッカーの中にしまったのだった。

「ごめん！ボール、学校に忘れたからちよつと取ってくる！」

僕はそう言つて、走つて公園をでた。

公園から学校は歩いてもたつた五分。

だからいつもここで忘れ物をチェックして今日みたいに取りに戻つたりしていた。

ランドセルを置いてきた分、少しだけ速く走れる僕はすぐに学校に着いた。

階段を駆け上がつて三階にある四年三組の教室に入ると、僕はロッカーの扉を勢いよく開けた。

その勢いのおかげでボールはロッカーからちよつと僕の左手に転がってきた。

放課後の教室は静かでなんだか怖かった。

窓から外を見てみるといつの間にかまた太陽は雲に隠れてしまつていた。

「急ごう」

僕は来た道に戻つて一階に着いた。

なんだか湿っぽい匂いを感じる。どうやら外からだ。

「雨だ…。」

昇降口に行く和外を見ないでも音と肌寒さですぐにそれがわかった。

音は朝にもまして大歓声のように響いている。

ちよつとでも外にでたらびしょ濡れになってしまいそうだ。

僕はしかたなく止むの待つためにその場にしゃがみこんだ。するとあるものが目に映る。

青い傘。

「これ、僕が今朝使ってきた傘だ。これも忘れてたんだ」

僕は自分に忘れ物が多くてちよつとだけ恥ずかしくなったけど、としかく青い傘を開いて学校を後にした。

公園に着くと、みんなの姿はなく、中央の木の下にたった一つの人影があった。

「あれ？はなちゃんだけ、どうしたの？」

はなちゃんが一人で木の下で雨宿りをしていたのだ。

「あ、ほら。葵くんが学校いっちゃったから、待ってたの」

「…そっか。ありがとう」

「うん。みんなはコンビニに行ったから、わたしたちも行く」

「そっだね」

僕はランドセルにボールを入れて、それを背負った。

「あれ？はなちゃん、傘は？」

「ごめん。持っていないんだ。わたしが学校来たときは降ってなかったからさ」

「そうなんだ。どうしよつか…」

「じゃあ、一緒に入ってもいい？」

「…うん。いいよ」

「ありがとう」

「ねえ、はなちゃんって、キャッチボール好きだったっけ？」

「あ、この前家に叔父さんがきてね、一緒にやったんだ、キャッチボール。それから好きになった」

「へえ。いいなあ、キャッチボール教えてくれる人がいて」

「葵くんの家にはキャッチボールしてくれる人、いないの？」

「うん。お父さんは毎日忙しいし、親戚はみんな田舎にいるからさ」

「そっか。残念だね」

「うん。まあ、その分みんなとたくさん遊ぶからいいよ」

「あ、それもそうだね」

「でしょ？早く、晴れないかな……」

「ほんとだよな。ああ、空がお友だちだったらいいのにな……」

「え？」

「だって、お友だちだったらお願いできるでしょ、晴れにしてくださいって」

「はなちゃんならなれそう」

「ええ、それどういう意味？」

「あ、いや、ほら。はなちゃんは優しいから空も友だちになりたい
と思ってるかなって」

僕は、本当に心で思った頃をつそのまま口にした。

「そうやって、葵くんは冗談うまいなあ」

「本当だつてば。」

「ほんと？」

「うん。はなちゃんはすごい優しいよ」

正直そのとき僕は、ちょっとおかしい気分だった。
それははなちゃんがあまりにも近くにいて、笑ってるから。

「ありがとう」

はなちゃんがそう言うつと、雨はちょうどぴたりと止んだ。
僕は傘をたたんで、右手を差し出した。

みんなも待っているコンビニまではあと五十メートル。
僕達は手を繋いで歩いた。

*

*

*

初めはなんでもない気持ち。

気がつくとそれは…淡い恋心。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9071a/>

夕立に咲いた青い花と僕の気持ち

2010年10月21日23時14分発行